No.49 2018.1.

砂丘

発行：独立行政法人　国立病院機構
鳥取医療センター
発行責任者：下田　光太郎

理 念

1．人類愛に基づく、質の高い医療を提供する。
2．患者本位の医療体制を確立し、充分な説明と同意の下に、自由意志を尊重し、人としての尊厳を守る。
3．あらゆる情報の公開に努め、医療人としての自己研鑽に努める。

トピックス

1．新年のご挨拶
2．シリーズ　ロボット病棟　No.4
3．小児科紹介
4．Comedical topics
5．第5回鳥取医療センター病院フェスタ2017
6．国立病院総合医学会に参加して

新年あけましておめでとうございます。

鳥取医療センター　院長
下田　光太郎

昨年度は当院にとり経営的に非常に厳しい結果となりましたが、今年度の経営状況は順調に推移しています。本年度は昨年に比して患者数が大幅に増えた事から、経常収支は黒字が予想されています。これは鳥取医療センターが地域から選ばれる病院へと進化していることの証であり、果たすべき政策医療から、地域医療構想に基づく医療まで、当院が地域に求められる病院としての役割を十分に果たしている事が明らかとなっています。本年は診療報酬、介護報酬、障害福祉サービス報酬の同時改定の年となっています。当院にとっての影響はこれから明らかになりますが、これまでと変わらず患者さんの立場に立った安全安心な最先端医療の提供を行い、さらに臨床研究、情報発信を行いながら、地域医療に貢献出来るよう今年も新たな気持ちで病院一丸となり頑張ってまいりますので本年もよろしくお願いいたします。

さて昨年も世界中で連日のようにIoTやAI関連のニュースがマスコミを賑わし、様々の分野でのAI導入の試みが紹介されました。本年もこの傾向は一層強まる事が予想されます。そうした中当院と連携している(株)ラシックが提案していたロボット病棟プロジェクトが経済産業省中小企業庁の新連携事業として昨年6月正式に認可されました。この事により予算が確保され11月より院内にロボット病棟プロジェクト推進室が整備され、実証実験が7、9病棟で本格的に始まりました。この実証研究データは詳細に分析されシステムの有効性や臨床的有用性の評価が行われる予定です。このプロジェクトは始まったばかりですが、将来的には患者さんからのあらゆる情報をニューラルネットワークを利用して学習する事により、医療現場に応用できるものへ発展させる事を目指しています。今日本は少子超高齢化社会を迎える中で、医療・介護・福祉を守るために人やお金の問題を克服しなければなりません。したがってこの事業はまさに国家的な事業となることが期待されます。ここ数年内に医療・介護・福祉の中におけるITの占める割合は急速に伸びる事が予想されますが、鳥取医療センターから発信される情報が大いに貢献できるような事態になることを夢見ております。

本年も鳥取医療センターがますますの発展される事を祈念致します。

○シリーズ　ロボット病棟　No.4○

ロボット病棟プロジェクト委員会　看護部長　山　根　美　子

―いよいよ臨床研究「医療スタッフによる入院患者の病状把握に対するIoT機器による代替可能性の検討」がスタートしました―

今回のロボット病棟シリーズは、この度スタートしました臨床研究について一部紹介したいと思います。

2016年からロボット病棟プロジェクトが立ち上がり、数台のロボットを導入してきました。まずは、Pepperが病院玄関ホールで院内施設紹介や待ち時間のお相手や院内研修の講師補助をしました。次にコミュニケーションロボットPALROは、認知症治療病棟で患者さんと会話をしたり、集団レクリエーションに活躍しました。セラピー用アザラシ型ロボット「パロ」は、患者さんの癒しとなりコミュニケーションを促進してきました。

病棟の現状・課題について株式会社LASSIC（運営事業者）と検討し、実現したい病棟の姿を「ロボットが人に寄り添って会話を行い、センサデバイスから患者の生体情報が自動的に集約され、AIが状態変化を発見・予見し、スタッフへの通知を行う。スタッフの負荷は軽減され、患者ケアにより注力できる病棟」としました。これが実現すれば、医療スタッフの負荷軽減、患者のＱＯＬ向上、医療現場の働き方改革にもつながると考えます。

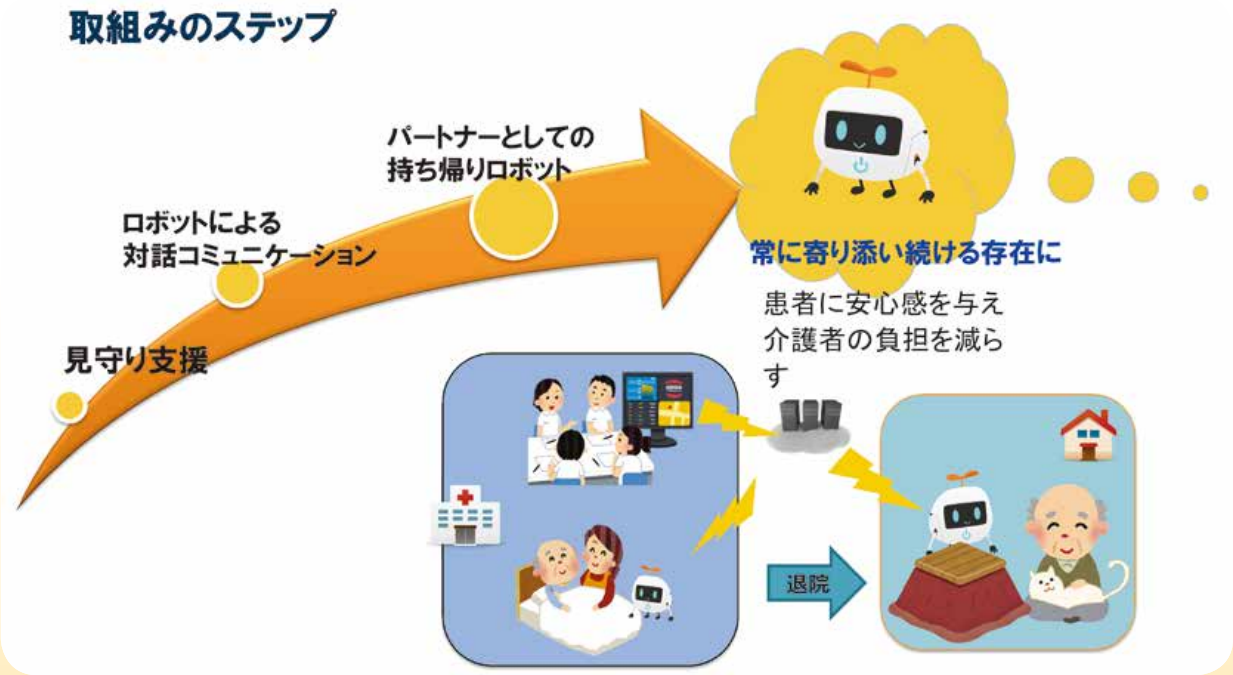
重点課題として、転倒転落事故防止、徘徊・離棟防止、スタッフ間連携の改善、認知症ケアの4点を掲げ、施策として

・転倒リスク推定・転倒検知
・位置情報の表示・通知
・ロボットと患者の会話時の表情や音声等から感情解析し共感しながら対話
・会話量・感情推移をデータとして可視化し介護者を支援

以上について取り組みます。

取り組みのステップとして、まずは見守り支援、続いてロボットによる対話コミュニケーション、そしてパートナーとしてロボットを自宅に持ち帰ることができればという構想です。まずは、見守り支援として、ロボットのカメラ映像をＰＣ・スマートフォン・眼鏡型デバイス等へ中継する仕組みを運用評価します。ウエアラブルデバイス等からの情報も順次連携していきます。患者さんの体の傾きや歩数、睡眠状態の確認、スタッフと患者の位置確認等をデータとして集約します。次に感情解析をもとに気分状態に合わせたコミュニケーションを図ります。高齢者に聞き取りやすい音域や方言への対応も検討します。入院中にその人の特性に添ったAI機能を調整したロボットをパートナーとして自宅に持ち帰り、共に生活している姿を目指します。

まだまだ課題はありますが前向きに取り組んで参ります。患者さん・ご家族の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いします。



● 小児科紹介 ●

小児科医長　赤 星 進 二 郎

当院の小児科は、鳥取大学医学部脳神経小児科で専門的な研修を行った常勤医２名と非常勤医師１名で診療を行っております。脳神経小児科（または小児神経科とよばれることもあります）は、小児科の専門領域のひとつで内科に置き換えると神経内科と精神科に関わる病気が主な専門領域となります。

当院の小児科の主な役割は、重症心身障害児者病棟の医療を行っていることです。重症心身障害児者とは、出生時や小児期に重い脳の病気にかかり、後遺症として重度の知的障害と身体障害をあわせもった方々です。成人と異なり小児は、身体も成長し残った脳機能も発達していくため、将来を見据えた治療方針が必要となります。医療の進歩に伴い、ここ10年くらいで入院された重症心身障害児者は、気管切開、人工呼吸器が必要な重症の方が増えています。生命維持のための医療的な支援が増えていますが、日常生活を快適にし、学校生活（白兎養護学校訪問学級が併設されています）を含め、障害があっても成長し楽しく生活できる環境を整えるようにしたいと考えています。これには、医師のみでは達成できないので、療育指導室、看護部、リハビリテーション部、栄養科などの多職種の方々と協力しています。一方で、気管切開や人工呼吸器を使用しても自宅で生活される方も増えています。これらの方々の支援として、短期入所事業や通所事業を実施し、合わせて体調不良時の入院治療も行っています。

小児科外来の診療の特徴としては、乳幼児からの発達を負担無く診察できるようにカーペット敷きの広い診察室を備えています（写真）。外来は、基本すべて予約制としています。また、長い診察時間が必要な場合に備え発達外来を午後から行っています。主に以下のような訴えに対応しております。（１）乳幼児期の発達の遅れ、（２）言葉や発音の問題、（３）学校での学業や行動の問題、（４）てんかん、（５）睡眠に関連する問題、（６）頭痛、（７）不器用やチックなどの運動の問題、（８）脳の病気による後遺症（自宅で過ごされている重症心身障害児者を含みます）、（９）遺伝相談などになります。特に当院小児科は、子どもの心と問題に関する支援医療機関となっております。このため、発達障害を疑われて受診される方が多く、診察までに時間がかかる場合が多くご迷惑をおかけしています。できるだけ早く診察できるように事前に問診票を記入していただくようご協力をお願いしているところです。しかし、当院では小児病棟がありませんので、入院が必要な緊急性がある疾患については対応が難しく当院以外の市中一般病院を受診していただいています。

その他、鳥取県東部地域の小児医療への係わりとして、鳥取県東部医師会急患診療所での診療、鳥取市乳幼児健診、健診後の精査の受け入れ、特別支援学校などの校医として関与などがあります。また、２年前から鳥取市医療専門学校で小児科の講義も行っています。

今後とも、地域の小児科医と連携しながら、今後増えると予想される自宅で生活する重症心身障害児者の支援を含め専門性を発揮できるよう努力したいと考えています。

●職場紹介　～4病棟～●

4病棟看護師長　柳　浦　京　子

4病棟は、重症心身障害児(者)病棟で、現在学生３名を含む53名の入院患者さんと、週末にショートステイの患者さんを受け入れています。H29年度より７：１障害者施設等入院基本料の加算を取得しており、看護の質を高め充実したケアを提供できるよう日々業務内容の検討・改善を行っており、より安全・快適に過ごせるよう努力しています。

病棟スタッフは新人２名を含め総勢39名で、摂食嚥下障害看護認定看護師が所属しており、重症心身障害児(者)看護の豊富な知識・技術を持ち合わせたベテラン看護師も多く、頼もしいスタッフがそろっています。

当病棟は食事介助を行う患者さんが45名ですが、窒息や誤嚥の危険を回避し、摂食の喜びを通じてQOLの向上が図れるよう認定看護師をはじめ言語聴覚士、理学療法士、作業療法士などと協力して機能評価や訓練を行い、摂食機能を維持していく事が出来るよう援助を行っています。又、週に３回の入浴日にはより快適に爽快な気分を味わってもらえるよう環境や体制を整えて、チームワーク良くパワー全開で介助をしています。

その中で七夕会、運動会、クリスマス会をはじめとした病棟イベントや、毎月の面会日に合わせて誕生会やお楽しみ会を行っており、御家族と思い出に残る貴重なひと時が過ごせるようにしています。毎月の誕生会においては、受け持ち看護師がメッセージを読んでカードを手渡し、記念撮影をしたりゲームや歌を歌ったりして過ごす中、普段は見られないような表情や笑顔が見られ御家族にも大変好評です。面会に来ることの出来なかった御家族には当日の様子が伝わるよう、撮影した写真を掲示板に貼って見ていただくようにしています。又、デイルームで定期的に昼食会も行い、普段顔を合わせることが少ないベッド臥床の患者さんに数名ずつ参加してもらい、楽しく食事をとるような機会を設けています。今後も、少しでも患者さんの療養生活の刺激となり、気分転換や楽しみになるように色々企画していきたいと考えています。

長期入院患者さんが多く、患者さん同士がお互いにニックネームで呼び合うなど顔見知りが多いこともあり家庭的な雰囲気の中、安全な環境で療養生活が送れるよう、看護師、療養介助専門員、業務技術員、理学療法士、指導員、保育士など各職種が協力して療養生活の援助を行っています。今後、患者さんの高齢化とともに合併症などによる重症化に伴い医療や看護度が高くなることが予測されるため、急変時の対応やリスク感性を高めて、より専門的知識を持って看護していきたいと考えます。

これからも、患者さん、御家族、スタッフ共々笑顔あふれる病棟にしていきたいと思います。

職場紹介 ～ リハビリテーション科 ～
作業療法士(OT：Occupational Therapists)

作業療法主任　加　藤　伸　一

私たちリハビリテーション科には理学療法士(PT)16名、作業療法士(OT)12名、言語聴覚士(ST)9名、事務助手1名の合計38名のスタッフが在籍しています。身体障害作業療法部門では、回復期・神経難病・重心の３つのチームが専門性を日々高めながら質の高いリハビリの提供を心がけています。

作業療法とは、病気やケガにより損なわれた生活の質(QOL)の回復及び再構築に向けて、そのひとに応じた作業活動を通じて身体機能・高次脳機能にアプローチしています。本来の目的は能力の回復にあり、身体への働きかけ以外にも環境調整などを行いながら日常生活(ADL)の安定および職業復帰などを目的としながら行います。

では、「作業」とは一体、何を指すのでしょうか。それは人の日常生活に関わるすべての諸活動をいいます。作業療法では「作業」を通して社会との接点を繋ぎ、今までの生活環境へと戻って行くための支援を行います。そのため、病気やケガ、年齢や性別に関係なく、その人の、その人らしい生活をそれぞれ大切な「作業」を通して築いていきます。

～ボタン一つでできること～

筋萎縮性側索硬化症の患者さんのご家族より、「テレビを自分で操作できるようにしてほしい」と相談がありました。今までは散歩に行ったり夫婦で買い物に行ったりと外出を楽しまれていたのですが、気管切開を機に寝たきりの生活が続くようになり、周囲への暴言が増え、自分では何もしなくなっていました。そこで環境制御装置を導入することで残存する右手の動きを使ってボタン一つでテレビを操作できるようになりました。それをきっかけに会話の代替手段であるパソコンを用いて普段の会話をするようになり、自分でできることを見つけていくにつれて主体的な生活を取り戻すことができました。

～手紙を書くこと～

脊髄損傷の60歳代の女性。病前は友人との文通を楽しみに生活をされていました。初めは代筆で手紙を書かれていましたが、作業療法を通してキーボードを使わないでできるパソコンを習得しました。結果、文章だけだったものが、イラストを挿入したり、背景や書体を変更したりと病前のようなこだわりの手紙を作成することができ、再び楽しみとして文通を行うことができました。また、パソコンを使うことで好きだった音楽を自分で聞けるようになったり、インターネットを通してメールや買い物など新たな楽しみを持って生活できるようになりました。

～着替えができること～

慢性呼吸不全の70歳代の女性。普段から身だしなみをきちんと整え、とても社交的な方でした。また外出や友人と合うことを楽しみとされていましたが、息苦しさから何事にも消極的となってしまい、自室に引きこもっておられました。そこで身支度を整えることを目標とし、楽にできる着替えの練習をしました。すると次第に化粧をしたり、身の回りを掃除したりと自ら考え、日常生活を送れるようになってきました。また、普段から周りの人との交流も積極的に行うようになり、笑顔が見られるようになりました。

以上のように、作業療法士は主体的な生活を行っていけるよう、患者さんの生活に寄り添った視点を大切にしながらリハビリテーションを行っています。患者さんの「がんばる」だけではなく、いまできる能力で社会との適応を促していくことを手助けさせていただきます。片手で料理を作る練習や実際に家や施設を訪問させていただき、できるだけ本来の生活状況と合わせた環境でリハビリを行っていきます。今後も、チーム医療の一員として多職種と連携を図ることで、最良の作業療法が提供できると考え日々精進して頑張っていきたいと思います。

● Comedical topics ●

【放射線】(富田正二)

「レントゲン撮ってきて」とか「レントゲンに行ってきて」と言われ放射線科を訪れますが、「レントゲン」って何でしょう。これは1895年にＸ線の発見を報告し第１回ノーベル物理学賞を受賞したドイツの物理学者の名前です。写真のことではないので、あしからず。

この放射線科で１番気になるのが「被ばく」。福島第１原発をはじめ数々のニュースで出てくるのは怖いお話ばかり。しかし医療で使われる放射線（Ｘ線）は身体に影響が出ると言われているよりはるかに少ない量を使用していますので安心して検査をお受けください。

放射線に関して、ご不安やご疑問なことがございましたらいつでもお声かけください。

次回：「骨密度」

【心理部門】(田中聡子)

心理学豆知識「決定に影響を及ぼすフレーミング効果とは？」

専門家にaとbどちらの説明を受けた人々が高額な家屋の断熱工事を行う決定を下しやすいと思いますか？

a. 工事によりどれくらい光熱費を節約できるかを詳しく説明された（節約条件）

b. 工事を行わない場合の損失を詳しく説明された（損失条件）

これは、心理学における「フレーミング効果」を使った実験です。フレーミング効果とは、物事の本質だけではなく、どこに焦点を当てるかにより印象が変わり、人の意思決定に影響を及ぼすことをいいます。

さて、実験結果ですが、bの損失条件の方がaの節約条件よりも2倍も工事に踏み切る傾向があったそうです。この結果からわかるように、人は損失を嫌い、それを避けようとして判断を下す傾向があります。消費行動の他、治療法の選択などにおいてもフレーミングが意思決定に影響を及ぼすことが知られています。バイアスのかからない目で世界を見ることは、われわれ人間にとって難しいのです。

【療育指導室】(前田勝也)

当院には重症心身障害児・者の方が約150名入院していますが、皆さんはその状態をご存知でしょうか。

重症心身障害児・者とは、重度の知的障害と重度の肢体不自由が重複している方のことをいいます。重度の知的障害とは、ＩＱ（知能指数：平均100）で言うと35未満とされています。重度の肢体不自由とは、ねたきりもしくは座れる程度とされています。このような重度の障害をどちらも持っている方となります。

児と者については、法律上年齢によって分けることとなっており、児は18歳未満の方、者は18歳以上の方となります。

重症心身障害児・者の方は、普通のご飯を食べることや服を着ること、会話をすること、中には呼吸をすることすらままならない方が多くおられます。つまりは、皆さんの助けや関わりなく生きていくことはできません。

重症心身障害児・者の方は職員とよく院内を散歩しています。その際は、ぜひ一言声をかけて下さい。その一言が本人にとっては生きていく大きな力になります。そして、その一言のお礼に、きっと、生きている大切さや生きていく力を感じさせてくれますよ。

【栄養管理室】(中尾陽香)

7月、七夕行事が実施されました。その際病棟より七夕の目玉となるものが作れないかと依頼がありました。清涼をイメージして海を泳ぐサメを作成することになりました。いざ作るとなると、スイカが割れないようにどうするのか、海をどのように表現するのか不安でいっぱいでした。一番苦戦したのはサメの歯です。ギザギザに切るのは本当に大変でした。試行錯誤を重ね本番当日はすばらしいものができたと自負しております。患者さんの笑顔と歓声を聞いたときは、すべての苦労が報われたように思います。

今回は9病棟で依頼を受けて、引き受けた形ではありますが、今後他の病棟からの依頼や栄養管理室自ら提案してこのようなイベントが実施できれば、更なる病院の活性化につながると信じております。

● 第5回鳥取医療センター病院フェスタ2017 ●

副看護部長　松 永 登 志 子

10月28日(土)に第5回鳥取医療センター病院フェスタ2017が「地域とともに鳥取医療センター　ロボットと歩む未来に向かって」をテーマに開催されました。当日はあいにくの雨模様となりましたが、お子さん連れのご家族を中心に400名余の来場がありました。

当院のロボットペッパー・パルロ・パロ・かぼちゃんが皆さんを出迎え、愛媛より参加いただいた「ペパーミント」によるコンサート、倉吉からの「打吹童子ばやし」による和太鼓演奏、今話題のセイコーエプソンさんとの共催によるゆめ水族園や市民公開講座など盛りだくさんな内容でした。

「ペパーミント」のコンサートでは、一緒に歌を口ずさみながら楽しんだり、太鼓演奏では、小学生の見事なバチさばきと太鼓の音の迫力に「すごいね」「上手だね」と演奏に感動し、見入っておられました。市民公開講座では、当院の感染管理認定看護師によるマスクの装着方法、摂食・嚥下障害看護認定看護師による嚥下体操、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師による脳卒中発症時の対応などの講義がありました。体験スタンプラリーでは、①調剤体験②白衣体験③顕微鏡体験④AED体験⑤車いす体験⑥作業療法体験を行いました。AED体験で小さなお子さんが、かわいらしい手で一生懸命心臓マッサージを行う姿や車いす操作に苦労する姿が見られました。体験スタンプラリーに何度も廻ってくださったお子さんもあり大いに盛り上がった企画でした。その他にも患者さんや職員の作品展示、健康相談、カラオケ、屋台、鳥取市のマスコットのトリピーと因幡のぴょん兎くんも参加し大盛況でした。

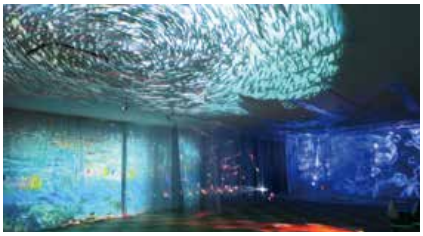
最後になりましたが、病院フェスタを開催するにあたり、ボランティアの方をはじめ様々な方にご協力いただき盛況に終えることができました。誠にありがとうございました。

第5回鳥取医療センター病院フェスタ2017 ゆめ水族園

児童指導員　二　宮　周　子

10月28日(土)当院の療育訓練室を会場にセイコーエプソン株式会社さんによる「ゆめ水族園」が開催されました。「ゆめ水族園」は社会貢献活動の一環としてされている活動のひとつで2015年からスタートされたようです。鳥取医療センターは20カ所目の開催地とお聞きしました。

「ゆめ水族園」についてはNHOだよりで何度か目にしたことはありましたが、実際に自分たちの病院で開催できるなんて思ってもみませんでした。最初のきかっけは「ゆめ水族園」を体験された四国こどもとおとなの医療センターから情報提供を頂いたことです。話を聞けば聞くほど魅力的な内容だったので、重症心身障害病棟のみにとどまらず、入院患者さん、地域の方にも是非体験して頂けたらと思い、病院フェスタとして更に盛り上げていこうとセイコーエプソンさんに声をかけさせていただいたところ快諾いただけ開催に結びつきました。



前日から準備が始まり、3トントラックで様々な器材が運び込まれ、丸一日をかけてゆめ水族園が出来上がりました。前日は試行的に職員のみで見学させていただきました。一歩入れば、そこは、もう水族園っ！いつもの風景が全く別の世界になったような空間でした。見慣れていたはずの床も天井も壁もキラキラした光の中で優雅に泳ぐ魚たちやお花で溢れていました。柔らかで優しい音楽が流れ、天井から吊るされたふわふわの布の感触は心地よく、いつまでもこのまま見ていたいような気持ちになりました。「わぁ、素敵」「綺麗だね」と、次々と自然に言葉や笑顔が溢れ、連日の準備で疲れ切った私たちの心もあっという間に癒されました。

そして当日、全部で約300名の来場がありました。患者さんの中には思わず手に触れようと手を伸ばす人、魚を追って視線を動かす人、笑顔になる人、声をあげる人、本当に色々な表情や仕草を見ることができました。小さな子どもたちの中には嬉しくなってはしゃぐ子、ただただ見とれてしまう子、あまりない体験からか怖がってしまう子もいました。大人も子どもも障がいも関係なく、わくわくしたり、ゆったりと癒されたりと、それぞれが何かを感じることのできる空間って本当に素晴らしいと実感しました。

また、医療的なケアが高く療育訓練室まで来ることが難しい患者さんの為に「出張ゆめ水族園」でお部屋にも訪問してくださりました。ファンタスカーと呼ばれる移動式のプロジェクターで、あっという間にお部屋が水族園に早変わり！お魚やお花がゆらゆらと気持ちよさそうにしているのを見て患者さんやご家族の方も目をキラキラ輝かせていました。「また見たいね」「もう一回来てほしい」と患者さんや家族、職員からも声があがったことがとても印象的でした。

今回の「ゆめ水族園」の体験を通して、非日常的なワクワクする体験から起こる心情の変化や、身体の変化は、きっと人生をより彩よくするために必要なものだと感じました。誰の目から見ても素晴らしいと思えることや楽しいと思えることは、きっと表情の捉えにくい患者さんにも五感から伝わるものがあることを改めて感じさせられました。この経験を活かして今後も患者さんが充実した療養生活が送ることができるよう支援していきたいと思います。

● 国立病院総合医学会に参加して ●

院長　下 田 光 太 郎

「医療現場におけるロボット技術の応用と今後の課題」と題してシンポジウムが開催されました。当院から「病棟におけるロボット技術の応用」と題して院長下田光太郎と株式会社ラシックの太中啓介氏が発表いたしました。このシンポジウムは５演題が発表され、手術ロボット・ダビンチについて２題、サイバーダイン社の山海嘉之氏より「サイバニクス医療：次世代医療開拓の取り組み」、オリィ研究所の吉藤健太郎氏より「人と人をつなぐロボット技術」と題する講演がありました。当院からの発表は認知症治療病棟、回復期リハ病棟で取り組んでいるロボット病棟プロジェクトに関するものです。講演前の控え室では他の演者の先生からもこの取り組みに大変注目されました。このシンポジウムは近未来の医療のあり方を示すような様々の新たな試みが発表されて大変刺激を受けた方も多かったと思っています。次年度の学会がさらに楽しみになるようなシンポジウムでした。

栄養士　中　尾　陽　香

11月９日に平成29年度全国国立病院管理栄養士協議会総会が高松センタービルにて行われました。今年度は中国・四国グループの栄養士が中心となり、司会進行及び会場準備を行いました。私は各会議室の机と椅子のレイアウト変更及び飲み物の準備を主に行いました。当日は慌ただしくどこに行ったらいいかわからない状態でしたが無事に終えることができました。総会後、ロイヤルパーク高松にて意見交換会が開かれました。初めてお会いする方ばかりでとても緊張しましたが、日常業務で困っていることなど、先輩方とお話しをさせていただくことできました。また、余興では高知県のよさこいを披露するなど大変盛り上がりました。11月10日・11日は第71回国立病院総合医学会が高松市にて行われ、口演者として参加させていただきました。諸事情により代読での参加となりましたが、各病院の様々な取り組みや症例検討発表など大変貴重なお話を聞くことができました。今回学んだことを日常業務に活かし、自身の発表につなげていきたいと思います。このような機会をいただき誠にありがとうございました。

リハビリテーション科　言語聴覚士　宮 口 真 梨 菜

11月10日から11日までの2日間、香川県で開催された、第71回国立病院機構総合医学会に参加しました。私にとっては初めての学会発表の場だったので、少し緊張しながら会場のある高松市に向かいました。1日目は、特別講演を聞いたり、同職場のスタッフの発表を聞いたりしましたが、学会には、大勢の人が集まっており、どの会場もとても活気にあふれていました。休憩スペースには、地元の名物うどんが無料で食べられるブースもあり、長い行列ができていました。

私自身の発表は、2日目でした。なんとか無事に発表と質疑応答の時間を終えたのですが、セッションの終了直後に多くの方に話しかけて頂き、とても驚きました。私の発表は、小児の機能性構音障害の言語訓練に苦慮した症例でしたが、似たような経験を持つ方や、経験年数の長い方から様々なアドバイスを頂きました。沢山の方から色々な視点でアドバイスを頂くのは新鮮で、全国に病院がある国立病院機構ならではの組織の大きさが感じられ、とても有意義な時間となりました。今後もこのようなつながりや機会を大切にしていきたいと思います。

発表に際して、ご指導を頂いた同科のスタッフの皆様、ありがとうございました。

リハビリテーション科　精神科デイケア所属　作業療法士　磯　江　慎　吾

先日、香川県高松市で行われた第71回、国立病院総合医学会に、認知症治療病棟での取り組みについて発表させて頂きました。昨年の認知症治療病棟開棟と共にスタートしたロボット病棟プロジェクトの一部である病棟内のロボット使用について、まだまだ課題が山積しておりますが、現状を発表させて頂きました。発表時間こそ短かったものの、興味を持って頂け、ご意見も多く頂くことができました。ロボット病棟プロジェクトに関しましては、認知症治療病棟に携わる多職種共同で話し合い、進めている所でありますが、他病院の方のご意見は視点も様々で、自分にない考えを多く学ぶことができた貴重な機会でありました。また、発表としてまとめることで、一度立ち止まり、今行っている事を整理できた事も、問題点から改善点まで見直すきっかけとなり、新たな気づきも多くありました。

他病院の取り組みについても、過去の追跡から今話題のトピックスに関連した内容まであり、患者様の為に、ご家族様の為に、働く職員の為にと、専門職としての熱意を感じるものが多くありました。他病院の取り組みから、発表で得たご意見から得た広い視点を、自分自身の業務に活かしたいと思います。

外来診療科担当医表

独立行政法人国立病院機構鳥取医療センター　　平成29年４月１日現在

		月	火	水	木	金
内　科	循環器	松　本		松　本	松　本	松　本
	呼吸器	山　本	山　本	山　本		
神経内科	1	高　橋	齋　藤（てんかん）	井　上	金　藤	土居 充
	2	下　田	下　田	金　藤（嚥下外来）	土居 充	田　中
	3	小　西	田　中	齋　藤	小　西（井上）	房　安
	4		房　安	北　川	三島 香	
	5					
	専門外来（予約制）	失語症 パーキンソン病 高次脳機能障害	失語症 パーキンソン病 高次脳機能障害 てんかん	失語症 パーキンソン病 高次脳機能障害 嚥下障害 てんかん	失語症 パーキンソン病 高次脳機能障害	失語症 パーキンソン病 高次脳機能障害
もの忘れ外来		高　橋（午　後）		下　田（午　前）		小　西（午　前）
小児科		中　野	小　松	赤　星	中　野	赤　星
	専門外来（予約制）		発達外来 赤　星	発達外来 中　野		
精神科 初診	診察室１	長　田	休　診	助　川	長　田	休　診
	完全予約制ですので事前の予約が必要です。					
精神科 再診	診察室１		助　川			坂　本
	診察室２		坂　本	土井 清	助　川	土井 清
	診察室３		岩　田	長　田	幡	
	診察室５		池　成		高　田	林
	診察室６					柏　木
	診察室８					
	専門外来（予約制）				睡眠外来 坂本・高田	
外　科		古　澤	古　澤	古　澤	古　澤	古　澤
整形外科（隔週：8：30～13：00）			市立病院医師			
リハビリ入院相談（13：00～15：00）	地域医療連携室	齋　藤	土居 充	土居 充	齋　藤	齋　藤

『鳥取県難病・相談支援センター鳥取』

受付時間　平日　9：00～16：00迄
電話・ファックス兼用　0857－59－0510
メールアドレス　soudan-sien@tottori-iryo.hosp.go.jp
相談員　太田看護師

◆所在地　〒689-0203 鳥取県鳥取市三津876番地
◆電話　0857－59－1111
◆診療受付時間　午前８時３０分～午前１１時３０分
◆専門外来診療時間　午後１時３０分～午後３時００分（睡眠外来の受付時間は午前中です）
◆休診日　土曜日・日曜日・祝日・年末年始、ただし、急患の方はこの限りではありません。
◆ホームページ　http://tottori-iryo.jp/
◆地域医療連携室　TEL 0857－59－1111（内線275）　FAX 0857－59－0713